世界に広がる
ノートルダム教育修道女会
（School Sisters of Notre Dame）

2020.6.12

シスタージュディス鎌田論珠

今日は、みなさんがノートルダム教育修道女会を母体とする大学に入学されたことで、自分の世界がどう広がったのかを知って欲しいと思ってお話をします。

前回までの「ノートルダム学」の授業ですでに、大学の母体である修道会は、200年近く前に南ドイツで始まり、アメリカを経由して日本に伝わってきたこと、ノートルダムの教育理念が、「**教育は人を変える。人が変われば世界も変わる**」であることを学ばれたと思います。

私たちノートルダムのメンバーは、「**自分たちの生き方により、引き裂かれた世界への、和解と一致の証しとなる**」ために活動しています。みなさんも、この大学に入学されたことで、ノートルダムの一員となられました。その結果、自分の世界がどう広がり、自分の生き方を地球のためにどう役立たせることができるのかを考えながら、今日の話を聞いていただければと思います。

五大陸に広がる「シャロームネットワーク」

ノートルダム教育修道女会（School Sisters of Notre Dame、以下、「SSND」、あるいは「修道会」）は、世界の約30カ国に広がっています。

世界に広がっているというのは、いろんな国にノートルダムの修道会がありますよ、という以上に、五大陸のすべてを網羅していることに意味があります。五大陸は世界中の気候や文化、社会情勢の多様性をそれぞれに含んでいるからです。

また、SSNDは「シャロームネットワーク」という組織を作って、ネットワークとして働いています。アジア地区の本部は日本にあって、**ノートルダムに入学されたみなさんも、世界に広がるシャロームネットワークのアジア地区の一員です。シャロームネットワークは「正義と平和、そして自然界の統合」のための国際ネットワークで、NGOとして国連にも参加しています。**

シャロームというのは、ヘブライ語で「平和」という意味です。そして、シャロームの聖書的な意味は、人も自然も、「神が望まれる調和」のうちにあること、です。

シャロームネットワークの広がり

世界５地域（アジア・太平洋、アフリカ、ラテンアメリカ、ヨーロッパ、北アメリカ）の約３０ヶ国に約２０００人のシスターたちがいて、拠点がある。

１９９２年にシャロームが創設される。

それぞれの地域で合計１０の言語が使われているが、共通語は英語。

五大陸というのは、具体的には、日本が含まれる「アジア・太平洋」、そして「アフリカ」、「ラテンアメリカ」、「ヨーロッパ」、「北アメリカ」という５地域です。

この地域の約３０ヶ国に２０００人のSSNDのシスターたちがいて、いくつかの拠点があります。1833年に南ドイツで修道会ができて、最初からこんな風に世界中に広がる計画を持っていたわけではありません。必要とされる地域にシスターを派遣しているうちに、結果としてこのように世界に広がる修道会になったのです。

結果的に出来上がったこの「世界に広がるノートルダムのつながり」を、積極的に生かすため、1992年の修道会の総会でシャロームネットワークが造られたのです。修道会としての共通の言語は英語ですが、会全体では日本語も含めて、10の言語が使われています。

（https://gerhardinger.org/　という会のWebページは、英語、ドイツ語、ハンガリー語、イタリア語、ポーラインド語、（ブラジル）ポルトガル語、スロベニア語、スペイン語、日本語の９ヵ国語で提供されている）

シャロームネットワークの主な活動

- 教育:一人一人の力を十分に伸ばして幸せになる助けをする
- 正義に適った平和なグローバルコミュニティーづくり
- 活動を支える毎日の祈りをリレーで

シャロームネットワークがやっていることは、主に３つあります。

一つ目は教育です。教育は、地域の文化に依存しますが、究極の目的は、一人一人が神からいただいた力を十分に開花させて、幸せになる手助けをすることです。

二つ目は、正義に適った（かなった）平和なグローバルコミュニティーづくりです。教育の最終目的は何かと言えば、平和な世界を作っていくことです。

しかし、人間の力には限界がありますので、私たちは「教育」と「社会づくり」を、「祈り」で支えているのです。

シャロームネットワークの活動

（1）教育

- 教育：子どもから高齢者まで、あらゆる人々がいただいている力を十分に伸ばして幸せになる助けをする

シャロームネットワークがしていることを、それぞれ少し詳しく見ていきましょう。

まず、教育です。教育が目指すことは、一人一人が神からいただいた力を十分に開花させて、幸せになる手助けをすることです。

そのためには自分が神から頂いている良いものを知らないといけません。人と比較するのではなく、自分が何かに真剣に打ち込んだ時感じる充実感も大切です。そしてもう一つ大事なことは、人が持っている良いものに気づくことです。**人の持っている良いものに気づくことのできる人は、自分にも更に新しい可能性を発見できる人です。**

人は生涯成長発展の途上にあります。自分が成長をやめた人は人の成長を支えることはできません。

シャロームネットワークの活動

（2）グローバルコミュニティーづくり

- 正義に適った平和なグローバルコミュニティーづくり :人の尊厳が大切にされ、人と人、人と自然の関わりが健やかで、自然の豊かさが守られる社会作りに貢献する

二つ目は、正義に適った（かなった）平和なグローバルコミュニティーづくりです。

教育の最終目的は何でしょう。神から頂いた可能性を開花させるだけでは不十分です。自分が 教育を受けて、いろんなことに気づくようになれば、必要のある人に手を差し伸べることができるようになりますし、一人で、あるいは少人数ではできないことも何かの組織を作って人のために働き、社会をよりよくする力が備わります。

別の言い方をすれば、教育を受ける機会のあった私たちは、「正義に適った（かなった）平和なグローバルコミュニティーづくり」に積極的に貢献する責任がある、ということです。人の尊厳が大切にされ、人と人、人と自然の関わりが健やか（すこやか） で、自然の豊かさが守られることが、「正義に適った平和なグローバルコミュニティー」の土台です。

シャロームネットワークの活動

(3)毎日の祈り

・活動を支える毎日の祈りをリレーで

・日本の担当日は毎月23日

シャロームネットワークでは、教育と、平和なグローバルコミュニティーづくりのために活動していると話しました。

しかし、人間の力には限界があります。そこで私たちは、「祈り」で神の助けをいただきながら、教育と平和なグローバルコミュニティーづくりに励んでいるのです。

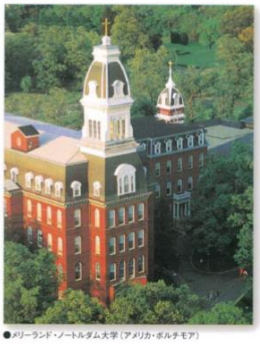
世界30ヶ国に修道会がありますから、毎月、リレー方式で祈りを捧げています。世界中のシャロームネットワークが、毎日、世界のどこかで私たちのため、世界のために祈っているのです。

日本の担当日は毎月23日で、世界の平和のため、さらには一人一人の健やかな成長のために祈っています。京都市左京区に岩倉修道院という、主に現役を引退されたシスターたちの修道院があるのですが、そこが祈りのセンターです。祈りのセンターは、世界に広がるシャロームネットワークを動かす発電所のような存在です。

世界への広がり(1)

- ドイツからアメリカへ:
  19世紀初めから半ばかけて ヨーロッパから新天地アメリカに移住した移民の子どもたちの教育ニーズに応えて
（1847年）

米国初のカトリックの女子大学（1873年）



●メリーランド・ノートルダム大学（アメリカ・ボルチモア）

ノートルダム大学（米国メリーランド州ボルチモア）

ここで、ノートルダム教育修道女会の世界への広がりの一部を、まとめておきます。

まず、1833年にドイツで修道会ができて、その14年後に、アメリカにいるヨーロッパ移民の子どもたちの教育のためにシスターたちはアメリカに渡りました。移民は、多くの場合、新天地で落ち着くまでは、毎日の食事にも困るほどの生活をしていますから、子どもの教育はどうしても後回しになります。

それに心を痛めた人たちが、ドイツの修道会に助けを求めてきました。**シスターたちはこの求めに応えてドイツからアメリカに渡り、その後約100年の間に、アメリカ各地に広がり、優れた学校教育で知られるようになったのです。**

世界への広がり(2)-1

<u>アメリカから日本へ</u>：

太平洋戦争後、全土が焼土と化した日本の教育ニーズに応え、同時に真珠湾攻撃で始まり、原爆投下で終わった戦争で敵対した日米の和解の一助になることを願って（1948年）

● 1948 年 11 月、飛行機で日本に向かうシスターたち

第二次世界大戦（太平洋戦争）で1945年に敗戦した日本は、全土が焼け野原になり、食物も十分なく、戦中の軍国主義教育を改め、新時代を生きる青少年のための教育導入も必要でした。このニーズに応えるため、京都のカトリック教会からアメリカのSSNDに学校開校の依頼が届いたのです。

アメリカのシスターたちは、「日本？言葉も文化もわからない場所で、教育ができるのだろうか？」と戸惑いましたが、**「ニーズのあるところには必ず神の助けもある」との信頼をもって、シスターたちはこの度も呼びかけに応えたのでした。**

日本軍によるハワイの真珠湾奇襲攻撃で始まり、米軍による２発の原爆投下で終わった太平洋戦争後の世界をより良いものにするには、日米両国の真の和解しかない。自分たちがこの困難なミッションを引き受けることで、和解のためのささやかな助けにでもなるならできることは何でもしたい、というひそかな願いがシスターたちを動かした、と聞きました。

世界への広がり(2)-2

アメリカから日本へ：

日米の和解のきっかけにもなると考えて来日を決意

セントルイスから日本へ（１９４８年）

最初に京都に派遣された４名のシスター方

一番右が、女子大初代学長 S. ユージニア

「ニーズのあるところには必ず神の助けもある」というシスターたちの信頼に、神はこの度も見事にこたえてくださいました。

１９４８年当時、敗戦国の日本は戦勝国であったアメリカ、イギリス、オーストラリアなどの連合国政府の支配下にありました。シスターたちが学校設立のための入国を申請すると、学校開設に必要な資金の用意があること、シスターたちが入国から２年間生活するための食料品、生活必需品の用意があることを条件に入国が許可されました。

そこで、この条件を満たすため、アメリカでは教会や学校で、子どもから大人まで、数多くの人々が積極的に協力をしてくださいました。貯めたお小遣いをそのまま寄付してくれた中学生、お誕生日にもらったキャンディーを握りしめて持ってきてくれた子どもがいたという話もあります。

シスターたちが日本に到着してからは、校地の購入、校舎の建築、学校開設の手続きなどなど、多くの日本人専門家の助けもありましたし、近所の方々は異文化での日常生活に戸惑うシスターたちを様々に助けてくださいました。

こうして、京都におけるノートルダムの学校が、中学校、高等学校、小学校、大学の順に開校されたのです。

世界への広がり(3)

- 日本からネパールへ：
  世界の最貧国であり識字率が10%と言われたネパールの教育ニーズに応えて（1983年）

ヒマラヤの国、ネパール

（パンディプール村からのヒマラヤ山脈の眺め）

「ニーズのあるところに、神の助けによって出向きます」というSSNDの思いと行動は、歴史を通して今日まで続いています。1948年に４人のシスターがアメリカから来日してから35年後の1983年に、**日本からネパールに４人のシスターが派遣されました。**

その頃の日本は高度成長期を経て、教育も充実し、十分豊かな時代になっていましたが、世界にはまだまだ十分教育が受けられない国や地域も多くありました。日本も、他の国の人々の援助でここまで成長できたのだから、私たちも他の国に協力していきたいという気持ちでいたところに、ネパールを含む３ヶ国から協力を依頼する呼びかけがありました。

その中でも、ネパールが国として最も貧しく、識字率（しきじりつ・15歳以上で母語が読み書きできる人の割合）がたった10％だったネパールを選ぶことにしました。ネパールはヒンズー教国で、当時は憲法で改宗が禁じられていたため、キリスト教の布教は全く考えず、教育の充実に専念することでミッションが始まりました。

1983年に4人のシスターは首都カトマンズに派遣され、ネパール語とネパール文化・教育制度について学んだ後、2年後に中部山岳地帯にあるバンディプール村に、ノートルダムの学校を開設しました。

派遣先でのシスターたちの体験

- ことばと文化を学ぶ
- 学校や成人学級を始めるなど、現地のニーズに応える
- 生活をしているうちに、見えてくる新たなニーズに応え、ミッションが発展する
- 現地の文化から学び、視野が広がり、豊かにされる

海外に派遣されたシスターたちは、どのように現地で教育を中心とした活動を展開していくのでしょう？例えば、アメリカから日本、日本からネパールは、現地のことばも文化も全く違いますから、まずはそれを学びます。

何でもその地域の人にやり方を聞かないとできないし、聞いてもことばが理解しにくければスムーズに進みません。自分の文化や言語の中では何でも自由にできていても、異文化・異言語の中ではそうは行かないのです。

謙虚になって、相手を「尊ぶ」気持ちがなければ、自分とは違う考え方ややり方から学ぶことはできません。これからみなさんは、留学して「ことばや文化の違い」に苦労する経験をするかもしれませんが、それは「違いを尊ぶ」心を育てるとてもいいチャンスです。

現地のニーズに応えて、異文化・異言語の世界に出かけて行くシスターは、実際に生活しているうちに、新たなニーズが見えてきて、ミッションは思いもよらない方向へ発展します。異文化の中で、現地のニーズに応えるミッションは、常に視野が開かれ、豊かにされる体験です。

再びネパールの話に戻ります。１９８５年にバンディプール村のノートルダム校は５５名の幼稚園児で始まりました。幼稚園が３年間、小学校が５年間の学校がまずでき、次第にその上に５年間の中学と２年間の高校もできました。

ノートルダム校では、貧しい家庭の子どもたちも入学ができるようにと奨学金制度を作り、スポンサーも募集しました。ネパールはかつてイギリスの植民地でしたので教育制度もイギリスに近く、小学生でも成績が悪ければ進級できません。**開校後何年か経って気づかされたことは、落第する生徒の中に奨学金生（貧困地区の子ども）が多いということです。**

この体験から分かったことは、貧しい家庭の子どもたちは学校に入学する前は、全く放置された生活を送っているということでした。仕事に出かける親が子どもを連れて行けないので、安全のため子どもを家の柱に括り付け、１日分の乏しい食事をあてがって出かけます。

子どもの脳はタンパク質などの栄養分の補給と、外からの刺激で発達するので、このように放置された子どもは発達が遅れてしまうのです。

そこでシスターたちは村で一番貧しい地域に保育園を作り、**保育プログラム**と同時に**一日一度の栄養ある給食**を提供することにしました。２～３年もすると子どもたちは驚くほど成長し、小学校に入っても貧しい地域の子どもが特別に落第することもなくなりました。

この話が近隣の村々にも伝わり、村人たちは見学に来て、自分たちの村にも保育園を作りたいので助けてほしいとの申し入れが出るようになりました。**これはシスターたちが現地の体験から学んで展開した新しいプログラムでした。**

2015年 4月
ネパールに大地震発生！

ネパールでは2015年に大地震があり、バンディプール村もノートルダムの学校も大きな被害を受けました。

驚いたことは、直接被害を受けた人々も地震の直後から、村のために自分にできる片付け仕事をしていたことです。また、日本をはじめ、数多くの国際的支援も受けながら、畑が流された家庭には震災特別奨学金を支給して子どもが学校を続けられるようにし、建築資材が支給されると自分たちの手で家の建て替えが始まります。

【自分たちでする】【助け合う】をキーワードに地震から５年、ネパールの復興はゆっくりと、着実に進んできました。

カーストを超えて学ぶ学園に発展

現在、ネパールで奉仕するシスターたち（現在は、2名が日本人、2名がアメリカ人）

ネパールでは、今はカースト制度による差別が法律では禁じられていていますが、今でもネパールの人々の多くはカーストによる生活習慣を引き継いでいます。けれども、外国から来たクリスチャンであるシスターたちが作った学校はその面で自由です。生徒たちもカーストを超えて、友達になり、仲良く学校生活を送ることができています。

カースト制度を超えるネパールの社会づくりは、私たちのバンディプールにおける教育の成果の一つだと思います。

この35年間のネパールのノートルダム教育は、大きな成果を生み出しました。卒業生はネパール国内ばかりでなく、世界各地で苦しんでいる人々に手を差し伸べる価値観を引き継ぎ、活躍しています。

アフリカ

- ケニア、ガーナ、シェラレオネ、ナイジェリア、ガンビア、そして南スーダンにもミッションが出来ている
- アフリカ出身のシスターたちも次々誕生している。

次はアフリカ大陸を紹介します。

１９５０年代から北米、ヨーロッパのシスターたちが派遣され、ケニア、ガーナ、シェラレオネ、ナイジェリア、ガンビア、そして内戦のさなかにある南スダーンにも、ミッションが出来ています。このところ毎年平均、５～６名のアフリカ出身のシスターたちが、誕生しています。

アフリカの国々で使われている主要言語は、植民地時代の宗主国によってフランス語、スペイン系語などと違いますが、ノートルダムは、英語圏の国でミッションを行っています。

皆さんは、アフリカの人々はみんな陽気で活発だと思いますか？ガーナとナイジェリアはいずれもアフリカ大陸の中西部にある国ですが、ナイジェリアの人は自分の意見をはっきり言うし、行動的、ガーナの人は控えめだと言われます。もちろん個人差はありますが。ですから**私たちは「アフリカ人は・・・」というように、アフリカ大陸にすむ人々をまとめて解説することはできないのです。**

ガーナ、整形外科訓練センター

ガーナの整形外科訓練センターです。

アフリカでは、医療奉仕者の養成コースが多くあります。内戦のために、地雷で足をなくした人へのケアなど、医療の必要性が高いからです。

ナイジェリアの学校

ナイジェリアの学校のシスターや生徒たちです。アフリカでは、たくさんのシスターが大学を卒業し、専門職についています。この中から、それぞれの分野で未来のリーダーが育って行くことでしょう。

ラテンアメリカ・カリブ海地域

- 豊かな自然と文化
- 500年以上にわたる植民地支配の影響が今も社会に
- 安住の地を求め、難民・移民となって移動する人々
- 教育のニーズは非常に大きい

次は、ラテンアメリカ・カリブ海地域を紹介します。シャロームの拠点は、アルゼンチン、ブラジル、グァテマラ、ホンジュラス、パラグァイ、ペルー、プエルトリコの７拠点にあります。

この地域は、豊かな自然と文化に恵まれています。その一方で、**５００年以上にわたるヨーロッパ諸国による植民地支配の影響**が今も社会の発展を妨げており、政情不安と貧困の苦しみから逃れ、安住の地を求めて、アメリカなどへ難民・移民となって移動する人々があとを絶たない地域でもあります。

ペルー、シスターカリナの成人学級

ペルーの成人教室では、子どもの頃学校に行くチャンスがなかった大人が、家庭を持ちながら、仕事をしながらも、学校に通っています。自分の子どもたちのためにも、自分も勉強しないといけないという思いでしている勉強が、社会を変える力にもなって行くのです。

この地域のシャローム活動拠点は、国が違い、広範囲であること、また、活動発展の歴史が違うことなどによって、7拠点（アルゼンチン、ブラジル、グァテマラ、ホンジュラス、パラグァイ、ペルー、プエルトリコ）に分かれていますが、シャローム活動が人々の生活に与えてきた影響は計り知れないものがあります。

北米は移民によって創られた国

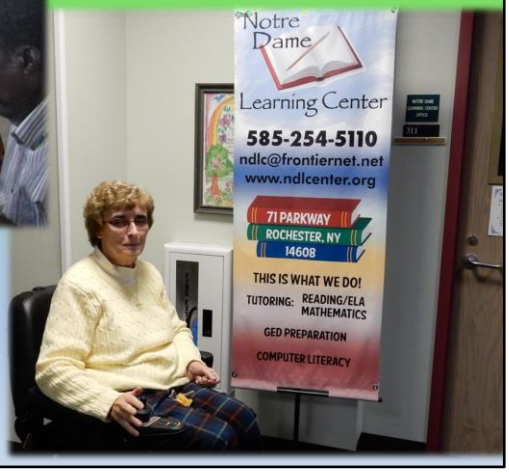
現在もメキシコ系アメリカ人を初め
難民・移民のためのニーズ、
北米の原住民のニーズに応えたい

拠点はアメリカ合衆国とカナダの２
つの国に

次は、北米です。

北米は、移民によってできた国で、アメリカのシスターたちも、自分たちももともとは移民だったということで、難民・移民、そして北米の原住民のニーズに応える活動を積極的に行っています。

アメリカ 成人学級



アメリカでも、子どものころに学校に行けなかった人々への成人学級が開かれています。

左の写真は、アフリカ系アメリカ人のための成人学級です。

右の写真は、Notre Dame Learning Centerです。英語のリーディング、数学、GED（高校卒業認定試験）の指導、コンピュータの使い方など、人々は必要に応じて登録し、学んでいます。

北米 シャローム会議

アメリカのSSNDシャロームの会議風景です。遠隔地からオンラインで参加しているシスターもいますね。

また、シャロームメンバーはシスターばかりではありません。一緒に活動しようと思う一般の男性でも女性でもメンバーになれます。

ヨーロッパ

修道会発祥の地ヨーロッパは、歴史の中で戦乱が絶えず、国境線が度々移動する困難を経験してきた。今、中東などからの大量の難民・移民を受け入れの新たなチャレンジに応えている。

最後はヨーロッパです。

ご存知のように、ヨーロッパは歴史の中で戦乱が絶えず、国境線が度々移動するという、困難を経験してきました。昨日までドイツだったのに、今日からポーランドの支配になった地域とか、そういう体験が歴史的に繰り返されてきた地域です。

そして今、ヨーロッパの学校では、中東からの大量の難民・移民を受け入れています。移民の子どもの宗教がキリスト教でない場合は、その宗教のお祈りができる場所を学校の中に確保するなどの工夫も必要となっています。

ヨーロッパにおけるシャロームの13拠点 ：

バチカン、オーストリア、ベラルーシ、チェコ、
ドイツ、ハンガリー、イギリス、イタリア、ポーランド、
ルーマニア、スロバキア、スロベニア、スイス

ヨーロッパにおけるシャロームネットワークの拠点は、１３ヶ国にあります。

ここに示した地図は、1900年ごろのヨーロッパの国境地図で、今とはかなり異なっていますね。

修道会の発祥の地「ドイツ」と「オーストリア」は文化的に近いのですが、その他の国、たとえばルーマニア、ハンガリーなどは、文化も言語もかなり違います。
ヨーロッパのいくつかの国は、東西分断の時代に大変な苦労をされましたし、宗教が認められなかった時期もありました。

1992年にシャロームネットワークが創設された話をしましたが、当初、国際オフィスはオーストリアのウィーンに創設され、1999年にローマに移動しています。

ドイツでのシスターの会議

ヨーロッパのSSNDのシスターの会議風景です。

同じSSNDでも国や文化によって服装が異なります。ドイツのシスターたちは現在このような制服にヴェールをつけています。

ドイツ・バイエルン、シスターたちの室内楽団

ノートルダムでは、伝統的に教育の中で音楽を大切にしてきました。**「音楽はことばの壁を超える」からです。**

ドイツのノートルダムの学校では、子どもたちは**外国語を２つ**と**楽器を１つ**を習うことが必須で、シスターたちも音楽を楽しんでいます。

この写真は、ノートルダムの発祥の地、ドイツのバイエルン（ドイツ語ではババリア）のシスターたちの楽団です。

「音楽はことばの壁を超える」具体例を紹介しましょう。

1948年に来日した４人のアメリカ人のシスターたちも、「日本に行ったら、学校にオーケストラクラブを作ろう！」と、たくさんの楽器を持ってこられたのです。その結果、今でも京都のノートルダムの学校ではオーケストラクラブが盛んです。

ルーマニア、子ども楽団

ルーマニアの子ども楽団の写真です。ことばが通じなくても、音楽は世界に通じますから、一つのコミュニケーションツールと言えます。

教えているのはハンガリーのシスター、習っているのはルーマニアの子どもたちです。

みなさんは、「ラウダート・シ」という本のタイトルを聞いたことがありますか？

2015年5月24日、教皇フランシスコによって公にされた回勅（かいちょく）です。回勅「ラウダート・シ」は、**環境問題**（は、環境だけの問題ではなく、経済とも教育とも人間関係とも結びついていること）をまとめた文書です。

教皇フランシスコは、第266代ローマ教皇、つまりカトリック教会の最高位聖職者で、回勅とは本来、教会全体の重要問題について教会メンバーに書き送る手紙です。

ところが、「ラウダート・シ」は、2015年の国連総会で取り上げられているのです。つまり、**「ラウダート・シ」のトピックは宗教の枠を超え、人類社会の重要問題を取り上げているということなのです。**

「回勅ラウダート・シ : ともに暮らす家を大切に」（教皇フランシスコ著 ; 瀬本正之, 吉川まみ訳）は日本語では2016年に発行されており、本学図書館にも所蔵されています。是非目を通してみてください。

ローマ

回勅 「ラウダート・シ（ともに暮す家を大切に）」
2015年5月発布。喜びの行進に参加するシスターたち

2015年5月24日、ローマではこのような回勅を人類が共有できたことを感謝し、喜びの行進が行われ、SSNDのシスターたちも参加しました。

あれから5年が経ったことを記念して、2020年の5月24日には、世界各地の正午に「ラウダート・シ５周年の祈り」（次ページ）が捧げられ、24時間かけてこの祈りが地球を取り囲んだのです。

皆さんも今、声を出してこの祈りを祈ることをお勧めします。

『愛である神さま、
あなたは天と地のすべてのものの造り主でいらっしゃいます。
あなたはご自身の似姿に私たちを造り、造られたすべてのものを見守り、管理する役割を私たちに委ねられました。
あなたは全てのものが慈しみをもって育まれるよう、私たちに太陽と水、そして豊かな大地をお与えになりました。

私たちがあなたの賜である被造界にふさわしく心を配ることができますよう、私たちの思いを開き心に触れてください。

私たちが共に住む家であるこの地球は、私たちだけのものではなく、あなたが造られたすべてのもの、未来世代のものでもあること、それらを健やかに保つことは私たちの責任であることの自覚を持つことができますよう、私たちを助けてください。

私たちが必要とする食料や資源を分かち合うため助け合うことができますように。

主よ、この試練の時にニーズある人々と共にいてください。殊に最も貧しい人々、置き去りにされがちな人々があなたと共にあることができますように。

私たちが真の回心をすることができるよう、恐れと孤独を希望と互いの愛の体験へと変えてください。

地球を覆うパンデミックが終息した後の世界に、創造的に連帯を生きる新たな在り方を示して行くことができますよう、私たちを助けてください。
共通善のための必要な変化を、勇気をもって、進んで受け入れて行くことができますように。

今私たちは、かつてないほど全てが互いにつながり合っていること、相互に依存しあっていることを実感しているのではないでしょうか。
私たちが地球の叫び、貧しい人の叫びに聴き、応えることのできる者となりますように。

現在の苦しみが、兄弟姉妹としてのより一層一致した、持続可能な世界に向かう生みの苦しみでありますように。

キリスト者の助け手であるマリアの慈しみに満ちた眼差しのもとで、私たちの主キリストによってこの祈りを捧げます。
アーメン』

（2020年5月24日、正午に世界各国で捧げられ、24時間かけて地球を取り囲んだ「ラウダート・シ５周年の祈り」）

大気・水・土地の汚染に声を上げるシスターたち

ノートルダムのシスターは今、世界の各地、で行動しています。「私たちの家である地球を守るために出来ることをしたい」と願って行動しているのです。

ノートルダムの**ミッション・コミットメント**の４つの動詞の最後が「**行動する**」でしたね。

「尊んで、対話して、共感する」ことは大切です。相手が話し終わるのを持って、自分の言いたいことを話すのではなく、本当に相手の主張をしっかり聞いて、自分はそこまで気づいてなかったな、ということを発見するところまでが、**対話**です。

相手の気持ちも考えることで、**共感**するにつながります。けれどもそこで終わってしまうのではなく、そこで学んだこと発見したことを実際に、「**行動**に移していく」のです。

アメリカで、難民支援の行進に参加するシスターたち

SSND(School Sisters of Notre Dame／ノートルダム教育修道女会）のプラカードを持って、難民支援の行進に参加するシスターたちです。これも、「行動する」例です。「尊ぶ、対話する、共感する」を土台に「行動する」のです。

行動するには勇気がいりますし、人間がやることですから、目指していることと実際に出来ることの間にはギャップがありますが、それでも、行動し続けるということが大切です。

国連にNGOとして助言

- 1994年には、国連の経済社会理事会に関わるNGOとして、特に教育、女性の地位の分野で専門的立場にある団体として認められ、25年間務めてきた。
- 自分の地域の利益だけではなく、世界的な視野で解決策を

シャロームネットワークが、国連に認定されたNGOであると言いましたが、それはどういうことでしょうか。

ノートルダムのシャロームネットワークは、1994年には、国連の経済社会理事会との協議資格を取得しました。これは、国連に対して、NGOとして、教育問題、特に女性の地位の分野で専門的な助言ができるということです。

国連の経済社会理事会というのは、国家を超えて、国際的な視野に立って世界の問題解決を考えていく団体です。この理事会には、NGOの存在がとても大切です。通常の国連加盟国の代表は、自分で言いたいことが言えるわけではなくて、国を代表して大使として国連に集まっているため、どうしても軸足を自分の国において発言をすることになります。

国際的な問題の解決に、複数の国の利益が前面に出たのでは、一つの結論を導き出すのは困難です。その時に、国を超えて活動しているNGOの存在が大切になってきます。特に私たちの会は、最初から世界規模で活動していますから、そういう団体の提案は、国連にとって有益なものになります。

毎年３月に国連で女性の地位向上の会議が開かれていて、私たちはオブザーバーを推薦することができますので、ノートルダムの学校に通う高校生や大学生を推薦して会議に参加してもらうこともできるのです。

SDGs も意識して貢献を

- SDGs　を意識して、国際的な視野での貢献を。

みなさんは、**SDGs** を知っていますか？

国連によって、2015年に「持続可能な開発のための2030年までのアジェンダ（Sustainable Development Goals）」として、17のアジェンダが示されたものです。

2030年まであと10年です。これからの10年にSDG s の達成に向けて人類社会が大きく前進してゆくことができるよう、私たち一人一人も視野を世界に広げ、出来ることを実行して行きましょう。

皆さんは今、これから４年間で、そのための力を身につける出発点に立っているのです。**ノートルダムのミッション・コミットメントを意識して実行することが、大きな一歩になるのではないでしょうか。**

京都のシスターたち

最後に日本のシスターたちをご紹介します。修道院が京都市内に4つ、滋賀県に一つ、ネパールに一つあり、60名のシスターがいます。

これから4年間の皆さんの大学生活が充実した楽しいもので、シャロームの一員として大きな成長の時となりますよう、シスターたち皆で祈っています。

関係するWebページ

シャロームネットワーク
http://ssnd.jp/shalom/

ネパールのバンディプールでの教育
http://ssnd.jp/ministry/nepal/

世界に広がるノートルダムファミリー
http://hojin.notredame.ac.jp/world/

SSDN(School Sisters of Notre Dame)
https://gerhardinger.org/

世界のSSNDのWebページのShalom説明ページ
https://gerhardinger.org/ministry/educational-vision/shalom-networkjpic/

2018年―2020年シャロームの焦点と決意（日本語）
https://gerhardinger.org/wp-content/uploads/2019/09/JP-Shalom-focus-2018-2020.pdf

ノートルダム教育修道女会　導かれて70年
–SSND日本ミッションの歩み- 1948～2018
http://ssnd.jp/70th/